

木嶋さんちと佐山さんち

2

木嶋さんちと佐山さんち 2

もくじ

二冊目のごあいさつ	---	夢路可帆	---	3
近 道 (里香八歳、駆・探四歳)	---	夢路可帆&水無月あるて (書き下ろし)	---	4
小さなボディーガード (駆・探八歳)	---	水無月あるて (Artemis 掲載)	---	13
予 感 (駆十三歳)	---	水無月あるて (Artemis 掲載)	---	17
進 路 (駆・探十五歳)	---	水無月あるて (Artemis 掲載)	---	19
兄と妹 (里香十九歳)	---	夢路可帆 (新まぐろなまぐろ〜はいばあく掲載)	---	22
告白の朝 (里香二十歳、駆・探十六歳)	---	夢路可帆 (新まぐろなまぐろ〜はいばあく掲載)	---	27
その朝、佐山家では…	---	水無月あるて (新まぐろなまぐろ〜はいばあく／Artemis 掲載)	---	29
それを聞いた木嶋家では…	---	夢路可帆 (新まぐろなまぐろ〜はいばあく掲載)	---	30
そして例の二人は…	---	水無月あるて	---	32
二冊目のあとがき	---		---	33
野上家・木嶋家・佐山家関連図	---		---	
スペシャルサンクス	---		---	
本文イラスト	---	美穂すろと	---	

本誌に掲載の文章およびイラストの無断転載、コピーを禁じます。

二冊目の「あぐさ」

皆様、こんにちは。『木嶋さんちと佐山さんち』二冊目の本となりました。

今回はいよいよ、双子の兄弟・駆と探及びその従姉・里香の、子ども時代から大人の一步手前(笑)までの活躍を中心にまとめた、シリーズ本編(笑)をお送りしたいと思います。そう、両親もさることながら、猿と香の背中を見て育った駆と、海坊主と美樹の背中を見て育った探。そして猿たちに時々ちょっかいを出す母親・唯香をいさめつつ、そんな双子と猿たちに関わりを持ちながら育っていく里香の物語を…。

…と書くとはやたらと違う話を想像してしまいます(苦笑)が、要するにこの本では、猿を始めとするシテイハンターのキャラクターたちが脇役に甘んじて、出番が当然のように少なかつたりするけど、でもやっぱりこれはシテイハン話が載った本なのだと言いたいわけでした(何じゃ、そりゃ)

と言うのも、どの物語も、例え出番は無くとも、主人公・駆や探、里香の後ろには、確かに猿たちや海坊主たちや、冴子や唯香の息遣いが見えているからです。…見えているはず、です。多分。(多分かい！)

彼ら(特に双子)は皆、時には笑い、時にはいろんな悩

近道

子供たちー

ある日の日曜日、佐山里香は母親で作家の唯香と、父親で編集者の博孝にお弁当を届けるべく、唯香のサイン会の会場となっている大型書店へ向かって、必死にテクテク歩いていた。

「もう、お母さんってば、本当にしかたないんだから!」そんなふうには、ときどき大人びた口をきく里香は、実はまだ八歳になったばかりの小学二年生の女の子である。

少々世間から外れた感覚を持つ母親と、その保護者のような父親、大時代的でありながらどこか抜けている祖父に育てられた里香は、同世代の子どもに比べ、しっかりと子だと近所でも評判の少女であった。

「お父さんにお弁当を作ってあげたいっていうから、協力してあげたのに」

佐山家では食事を作るのは主に博孝である。博孝が仕事に追われて帰宅出来ないときには、もちろん食事作りは唯香がすることになっているのだが、彼女はそんな時はたいい要領良く、実家へ帰ったり店屋物を取ったりして済ましてしまう。つまり、佐山家の家庭の味は、お袋ならぬ親父の味なのだ。里香は小学校へ上がってから、台所で父親の手伝いを始めたので、唯香より料理を作る手際が良かった。

『里香、お願い、お弁当作り手伝って!今日は珍しく博孝

みを抱えながらも、シテイハンキヤラたちに温かく見守られて、まっすぐで優しく、そして強く純粋な心を持った人間として育っていったからです。それは間違いなく、どのシテイハンキヤラたちも持っているだろう本質(もの)なのです。だから彼らは間違いなく、シテイハンの世界で生きていくキヤラシテイハンキヤラと言えるのではないでしようか。

…と、そんなふうを考えて下さると嬉しいな、と(殴)だから、この本では彼らの本質がよく現れていて、尚且つ将来を暗示している話を中心に選ばせて頂いています。その上、同時に社会人編となる「3」の前振りにもなっているという、おまけ(?)付きです。

もつとも、そんな理屈に関係無く、「駆くん、素敵!」「探くん、大好き!」というノリだけで読んでもらっても構いません(まさか、「実は里香萌えなの。」なんて人はいまい・笑)し、「木嶋ファミリーの話のファンだから。」という観点で読むのもまた一興かと思えます。

もちろん、シテイハン自体のファンだから、という本来の理由で読んで頂くのは大歓迎です(笑)

ではそんなところで、言い訳のみの前振り(爆)はここまでです。後は本編をゆっくりお楽しみ下さい。

二〇〇五年四月

夢路可帆・記

さんと一緒に仕事なのよ!」

博孝は現在、唯香の担当編集者では無いので、二人と一緒に仕事をする機会は滅多に無い。だが、二人が夫婦であることをコネとして使われることはたまにあった。

『博孝さんの担当作家のサイン会、当の作家が急病で倒れたんだって』

そのピンチヒッターとして、唯香に白羽の矢が立った訳だ。サイン会の前日の二十三時過ぎという時間的に余裕の無い状態で、博孝は会社から唯香に代理依頼の電話を掛けてきたらしい。

『でね、博孝さんったら、ひどいのよ!断ってくれていいんだとばかりに嫌そうな声出すの。せつかくあたしと一緒に仕事出来るっていうのに、ひどくない?』

それはお父さんがお母さんを自分の仕事で利用したくないからじゃないの?と熟睡してたところを夜中に叩き起こされた里香は思った。常々、博孝が里香にそんなことを言っていたからだ。

『そこでお弁当ラブラブ大作戦よ!美味しいの作って、あたしとの仕事を嫌がったこと、後悔させてやるの!』

でも朝早く起きる自信が無いから五時になったら起こしてね、と続ける母親に里香は素直に頷いた。母親が朝に弱いことを知っていたからだ。そうして朝になって唯香を起こし、手際の悪いお弁当作りも手伝ったのに、肝腎なお弁当を持っていくのを忘れたとその母親から電話があったのだ。大好きな母親であつても、里香はさすがに呆れていた。

「あれ?里香?」「里香ちゃんだ!」

背後でいきなりそう言われて里香は驚いた。振り返る